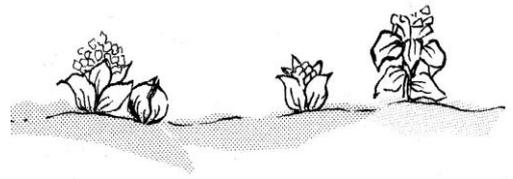


1. 「食を営む力」を育てるということ



子どもたちは、日々の生活の中でたくさんの人と出会い、さまざまな体験を通して、心と身体が成長していきます。

「食べる」ことについても、毎日くりかえして行われる食事から食べ方やマナーを学び、自然のすばらしさや季節を感じ、心地よい食卓から安心感や豊かさを学習していきます。つまり、乳幼児期に豊かで正しい食体験を重ねることは、生涯にわたる健康な生活を送るための基礎をつくる重要なプロセスなのです。

ところが、食を取り巻く環境は、時代の流れとともに、大きく変化してきました。今では、食材が豊かで、いつでもどこでもなんでも食べることができるようになりました。また、食に関する情報が、あふれています。

その反面、農業技術等の進歩により、食物の生産や流通が急速に変化してきたため、今を生きる子どもたちは、食物を通して季節を感じたり、基本的な食習慣や生活習慣を身につける機会が、希薄になってきています。

さらに、親の世代においては、食事づくりに関する必要な知識や技術が十分でないために、食を学ぶ場や親子のコミュニケーションの場となるべき家庭の食卓が、食育の役割を十分に果たせない状況がうかがえます。その結果、朝食を食べない子ども、偏った食事内容、疲れた・だるいと訴える子ども、生活習慣病にかかる子ども、キレやすい子どもなど、食生活の乱れに起因する心身のトラブル事例が、数多く報告されています。

これらの問題に対しては、食を通して親子、家族、地域のかかわりを深め、すべての子どもが、豊かな食体験を重ね、正しい食習慣を身につけていける能力、つまり《食を営む力》を育てるための環境を整えることが、重要な課題であります。